

岩村教授に感謝して

猪 木 正 道

ただいまニューヨークに滞在中のため、日付をはっきりさせることができないのは残念だが、1961年の秋、京都大学からフォード財団に対し、東南アジア研究に関する資金援助の要請を行なうことになった際、岩村忍教授はすでに名実ともに、東南アジア研究グループの中心となっておられた。

岩村教授は蒙古の中世史を専攻され、蒙古をはじめ、中国、インド、パキスタン、アフガニスタン、イランにわたってフィールド・ワークの経験が深い。それに天性のカリスマ的風格があり、きわめて自然に、教授は京都大学の東南アジア研究を指導されるにいたった。これは、京都大学にとってははかりしことができないほどのプラスになったけれども、岩村教授とその御家族に対しては、非常な御迷惑をかける結果を招いたことを深くお詫びしたいと思う。

フィールド・ワークに長年の御経験を積まれた岩村教授は、東南アジアの研究についても、つばをよく心得ておられた。若い研究者をタイやマレーシアの奥地へ送り込む場合、これらの前途ある青年たちが健康を保ち、研究の成果をあげて、無事帰国するためには、どのような施設が必要か、という点に関して、岩村教授がバンコクにリエゾン・オフィスを設置することを提言され、貫徹されたのは、その一例である。私は当初その必要性を理解できず、岩村教授に反対をつづけたことを今でもすこぶる後悔している。私がバンコク・オフィスの有用性を認めた時、寛大な教授は既往にこだわらず、私を同僚として扱って下さった。誰でもが年齢や地位を問わず自由に意見を開陳して、討議による協力関係を進めてゆくという京都大学東南アジア研究センターの所風は、初代の奥田所長および岩村前所長の風格に負うところが大きい。

奥田東総長が、6年前の11月、総長に当選のため所長を辞任された時、岩村教授は満場一致で所長に選ばれた。それから1968年3月末に所長をやめられるまで、4年と3カ月間、岩村教授は京都大学東南アジア研究センターをひきいられたわけであるが、岩村所長の一番大きい功績は、人文・社会科学と自然科学とのほとんどすべての分野にわたって、若い研究者を養成し、わが国の東南アジア研究を世界的水準にまで高めた点にあると私は確信している。本号に掲載された論文の質と量とが、何よりも雄弁に、教授の御功績を物語っている。若い研究者を信用して、自由にその才幹を伸ばさせるという点で、教授は全くかけがえのない所長であった。

京都大学東南アジア研究センターの創設に際しては、全く理解に苦しむ妨害が行なわれ、悪質な反対運動は今なお続いている。岩村教授は反対のための反対運動家たちのいやがらせにさぞかし憤慨されたと思う。しかし教授は、京都大学とその東南アジア研究センターのため、堪えがたきに堪え、忍耐に忍耐を重ねられた。不可解な反対運動に加わった人々も、必ずみずからの前非を悔いて岩村教授の前に頭を垂れる日が来ると私は信じている。

(1969年2月2日)